

犬山市は全国ただひとつ、全国学力テストに不参加



少人数の教育で子どもに確かな学力を

最初の視察は犬山市。国が競争をあることで子どもの学力づくりをしている中で、そうではないと異議を唱えているような実践をしています。一つは徹底して教員の数を増やしていること。30人学級にして、そのうえ、国語と算数、理科は毎時間、少人数のクラスに分けるか、担任以外のサポートの先生が入って複数の先生で授業をすすめています。見学させていただいた三年生は、11人で一教室です。そのために市は百人を大きく越える教員を採用しています。

二つ目、子どもたち同士の学びあいを基本にすえていることです。机も教壇に向かって並べられているのではなく、子ども同士が向かいあい、みんなの発表を聞き共感しあうことに力をいれています。小さなホワイトボードが配られ、みんなの問題を解きあい、教えあっています。友達のよいところをお互いに見つけあい、それを写真と一緒にクラスに展示しています。こうしたことで、子どもたち自己肯定感が育っています。

三つ目、教師の質の向上に努力しています。教員自らで副教本をつくり、大学の先生に実際の授業をみてもらい、改善に取り組みます。また、教員が授業準備に思い切った時間が割けるよう、学校の雑務や部活のために、特別な人材を配置しています。

正直、ここまで実践していることにびっくりのしどろしどろです。フィンランドが世界一の学力を誇っていますが、その秘訣は少人数と学びあいですが、これを日本でやっているのですから、随分妨害もあるでしょう。しかし、それにはたじろがない自信を感じました。教育に並々ならぬ意欲を感じさせる教育委員会です。学力テスト不参加では、市長ともぶつかっているようですが、

伊勢市の図書館(指定管理者としてTRCが委託を受けている)も視察しました。その中で、指定管理者となったことで、

窓口の接客は格段によくなった。開館時間が延びて、それらに比例する形で、入館者も増えている。

退職者が相次いでいる。当初は公共図書館長の経歴のある方を館長にすえたが、わずかの期間で2名が退職、結局本社から館長が派遣されてきた。また、TRCが現地採用した職員の退職も相次いでいる。3年間しか雇用を保障されていないため、確かに司書資格のある人は採用されるが、有能な人材は定着しない。

他の図書館(小俣図書館)は市の直営で今も運営しており、小俣図書館長の市の職員が伊勢図書館も担当、指定管理者の指導もしている。結果として市の側は、相当忙しくなっている。

伊勢図書館が指定管理者になったことで、将来市の職員の中に、図書館行政に精通した職員がいなくなることになりそうだ。等々のお話を聞くことができました。

もうひとつは、個人的な意見と断つたうえで、「指定管理者制度になって募集をすれば、企画力、経営の安定性を取れば、どうしたって地元は大企業にはかなわない。しかも委託期間は3年程度、これではなおのこと地元業者は育成できない。」指定管理者になって、どんどん大手の会社が参入して、地元の業者が追い払われていることに危惧しているとのことでした。